

講演会にいくと、自分の視野が広がるし、いい話であれば自分にとっていい刺激になるのという理由で講演会にいった。その時の自分が何を考えているか、あるいは何を求めているかによって変わってくるが、講演会は良い悪いがあるが、今回の講演会は個人的に良かった。

今回、初めて原丈人氏を知ったが、経済界では有名な方であるのであろう。よって彼の詳しい経歴については省略させていただく。

今回の講演会の内容は大きく分けて 3 つに分けられると思う。

「これからの基幹産業と公益資本主義」、「途上国の支援の形」、「日本ができることとその優位性」と私はまとめる。

①これからの基幹産業と公益資本主義

歴史的にみると基幹産業は繊維→鉄鋼→IT と移り変わってきて、現在は IT が終わろうとしている。理由は表 1 のように、コアテクノロジーが開発されそれがテクノロジーサービスまで発展させられると、次のコアテクノロジーがやってくるという経験則からいえるらしい。

表 1. 基幹産業とその応用

コアテクノロジー →	アプリケーションテクノロジー →	テクノロジーサービス
内燃機関	自動車、機関車、船など	輸送など
コンピューター	Windows やインターネット	Amazon.com など

そして、これからの基幹産業(ポストコンピューター)はコミュニケーター産業、PUC(Pervasive Ubiquitous Communication)と提唱していた。PUC とは wikipedia によると『使っていることを感じさせずに、どこにでも存在し、コミュニケーション機能を中心とした次世代のコンピューターの技術形態を指す概念のこと。』らしい。

そしてこれからの世界はいままで、アメリカや欧州がしてきたような市場万能主義+株主至上主義から公益的資本主義に移行するべきであると主張していた。まず、市場万能主義+株主至上主義とはどういうことかという、現在の資本主義は短期的な利益ばかりを重視し、リストラや業務削減などで一見会社が改善されたかのようにしてきた。そして、それを行い、改善して CEO に多額の報酬が支払われてきた。たとえば、アメリカン航空は過去の業務体系では会社がつぶれてしまうため、乗務員の給料を総額 340 億ドル削減し、業務を改善した。そして、その報酬として CEO に総額 200 億ドルの報酬が与えられた。なんともおかしな話である。よって、アメリカでは CEO の年収が一般社員の年収の 300 倍ということがザラである。一方日本は 10 倍くらいである。かつて奴隷社会が現在では悪とみなされているように、将来このようないびつな構造は、悪とみなされるのではないか。また、企業の利益を、短期的ではなく、長期的にみるべきだと主張していた。

一方、公益資本主義とは、会社が利益を上げたら、CEO ではなくて、NGO など社会的に便益のある

組織に配当しようという考え。メリットは、アメリカなどは、NGO など非営利組織にたいしては税金が低く設定されているため、効率よく、社会にインパクトを与えられる。そして、長期的に見ると、その国が発展すればリターンが返ってくるということである。今までの、株主至上主義が短期的にみるあまり、ゼロサムゲーム(誰かが損をして誰かが得をする)のであるのに対し、公益資本主義の考え方は、長期的に見ることでゼロプラスゲーム(誰もが得をする)である可能性が高い。

②途上国の支援

先進国で優れた最新技術を途上国に事業として導入することで、利益を上げ、その利益でさらに発展途上国の支援につなげると構想。その成功例として、バングラディッシュの bracNET を挙げている。バングラディッシュはアジアで最貧国であるらしい。そして、その改善案として農民などの情報格差をなくし、遠隔でも医療、教育を充実させることで、人々の生活を豊かに出来るという構想。この事業のすごいところは、最先端の技術を使って事業を行ったほうがトータルのコストが安く済み、インパクトも多きことだ。最先端の技術として、Win Max という無線技術を使用している。これはひとつのタワーをたてればその周囲 50km では光ファイバー同等の通信ができるというもの。そして、XVD という優れた画像圧縮技術を使用することによって、大容量の画像を送ることが可能で、遠隔の医療と教育を可能にしている。事業の構造は、60%を原氏の会社で出資し、残りの 40%を現地の NGO が出資することで、配当が NGO に行き、また公益事業に使われることになる。そして、原氏の会社も利益を得ることが出来る。ODA と違うところは、最先端の技術と最新モデルの事業構造を使うところである。普通、ODA であったら、すでに日本で発達した実証のある技術として光ケーブルをひいたりするであろう。しかし、これでは費用が高いし、インパクトも小さい。思い切ったことができるのが原氏の事業の特徴だと思う。また、原氏は、このように事業を得て利益を得て、その利益が又次の事業につながるような仕組みが使える新 ODA 構想を描いていた。(増える ODA)

③日本が出来ることと、その優位性

最近の投資のセオリーとして、利益を上げる投資として、すでに開発された技術に投資したほうが利益が高いとされ、技術開発から投資するのは利益をあげにくいとされている。つまり、図 1 のベンチャーキャピタルを得るのは良いが、リスクキャピタルまで得ようとするのは損をしやすいというのが主流らしい。しかし、これではあらたな技術が育たなくなってしまう。

そこで、是非日本政府やって欲しいことは、リスクキャピタルに投資を促すような制度を作ることである。なぜ日本がやるべきかというと、サブプライムをはじめとする現在の金融危機がある程度収束しても、アメリカ欧州は再び短期的な利益をあげようとし、サブプライムのような顔の見えない証券化された金融商品売るであろう。特に、排出権取引のようなものが危険である。しかし、日本人と特性として長期的なビジョンでコツコツと事業をやるのが性に合っているし、金儲けを生きがいにするような文化はいまだ少ない。よって、日本人が出来るのではないかとことらしい。

また、日本がリスクキャピタルに投資する意味は、数兆円を道路のように日本国内で蔓延したものをつくるよりも、bracNET のように将来利益を上げられるような金の卵に草の根レベルで投資したほ

うが、将来得られる利益が多いのではないかといいえるのではないかと主張していた。実際に原氏は財務省と経済産業省、首相にお願いをしているらしい。

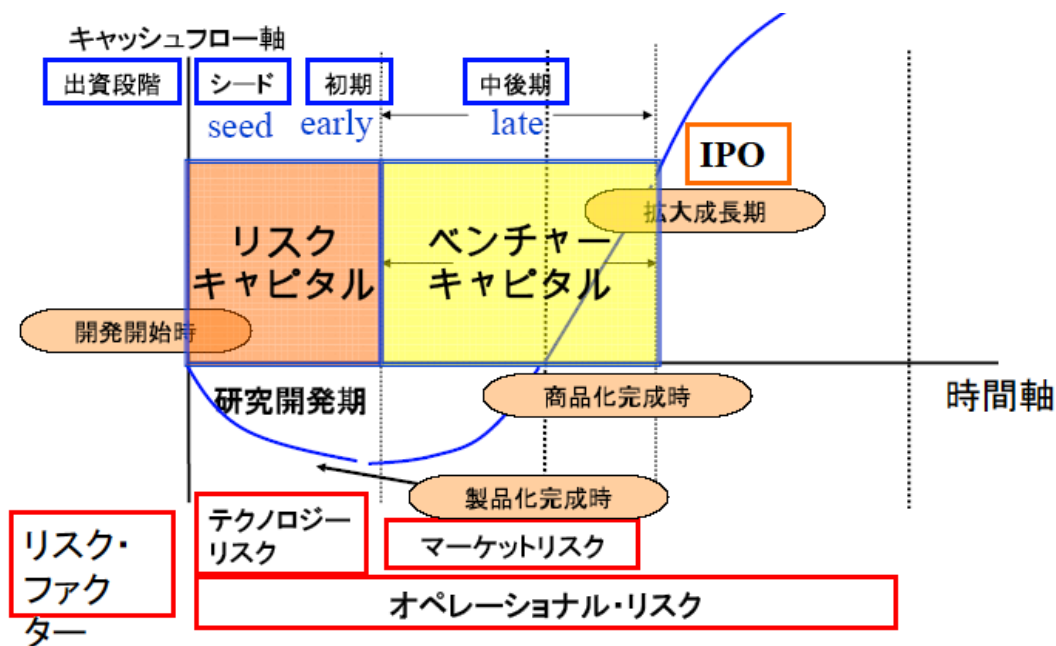


図 1 リスクキャピタルとベンチャーキャピタル

<http://www8.cao.go.jp/cstp/sangakukan/5thsummit/pdf/harappt.pdf>

・ 感想

私の彼に対する第 1 印象は、行動が早い人だなということである。この世に必要なだと思ったらすぐに行動をし、政府に駆け寄り、政府が駄目なら自分で事業を立ち上げる。そして駄目なら次の需要を求めて探求する。彼の行動を象徴する発現として、失敗例は成功例の 2 倍といていた。それほど試行錯誤を繰り返して、失敗してもただでは転ばないような行動を積み重ねてきたのだろうと感じた。

私にとって、今回の講演会は新鮮であった。これかの基幹産業が来るという概念をはじめて聞いたし、アメリカをはじめとする投資家たちの行動原理が良く分かった。そして、私も彼らの行動に疑問を感じ、公益資本主義のような新たな概念が必要だと思う。

また、よく評論家に多いのは日本は欧州に比べて遅いとか、駄目だといったネガティブな評価ばかりであるが(もちろん正しく評価するのも重要)、彼のように世界的に第 1 線で活躍されている方に、日本の強みを活かし、日本のポテンシャルを活かそうという建設的な意見を聞くとやはりやる気が出るものだと感じた。